

## 随 想

フジコー技報第16号によせて

## 北九州と私

(財)北九州産業学術推進機構

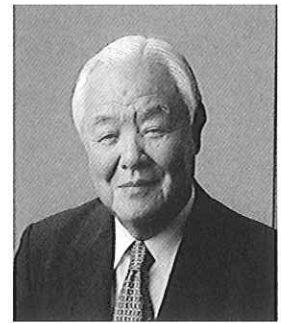
理事長

北九州市立大学

理事長

阿南 惟正

Koremasa Anami



9月のはじめ、晴れわたった休日に、皿倉山に登りました。帆柱ケーブルが整備されて、終点から山頂まで、スロープカーが付き、登りやすくなったと聞いていたからです。

久しぶりに山頂から展望する眺めは、すばらしい限りでした。一旦雲がかかったものの、風が出て晴れると、すばらしい景色になります。近くは八幡の町、洞海湾周辺、若戸大橋の向うにひろがるエコタウン、風車群、西に遠賀川、遠く響灘には白島をはじめとする島々。

しかし、考えてみれば、日本の中で、この50年の間に、これだけ景色が変わった町も少いでしょう。私が初めて八幡製鐵所に赴任したのは1956年、その時早速接したのが、この山の上からの風景でした。勿論ケーブルは無く、山頂までは徒歩で登る。その眼前に広がるのは、製鐵所の高炉と平炉の群、基処から噴き出るのは、まさに天を焦がそうとする煙と炎でした。特に、鋼鉄を造る平炉工場から出る煙は、炉内の反応の内容に変じて色が種々と変わるので、7色の煙といわれました。折からの日本の高度成長の始まりの象徴として、1958年、木下恵介監督はこの現象をとらえて、「この天の虹」を製作、高い評価を受けました。まさに、「鉄の町」というにふさわしい光景でした。それが全く変わった形で眼下に展開されています。

数日経って、博多天神の三越で行われている「よみがえる西鉄ライオンズ展」を見に行きました。この展示会は、9階の三越ギャラリー会場で広いスペースを取って開かれ、往年の最強軍団、西鉄ライオ

ンズの最盛期を画いて、きわめて迫力あるものでした。

私が八幡に入社した1956年は、丁度西鉄の日本シリーズ三連覇が始まった年、その強さに北九州のファンも熱狂していたときでした。飲み屋で西鉄の悪口でも言おうものなら、叩き出された頃です。私たちが、折を見て平和台に出かけ、その猛威に接したことがあっただけに、懐かしい内容でした。特にその中心は、鉄腕稲尾和久投手であり、三連覇した58年のシリーズ第5戦でのサヨナラホームーや、奇跡の4連投は、雨の降る古いフィルムを通して、くり返し会場に流されていました。食い入るように見つめている人は、私より少し年配の高齢者が多かったように思います。三原監督の下、中西、大下と共に猛打線の中心だった豊田泰光選手が「水戸から博多まで24時間かかった」と語っている記事がありました。事実、私が東京から八幡に赴任した時は21時間かかった思い出があります。特急「あさかぜ」ができて、14時間で東京に行けるようになったのは、その20年後だったと思います。

当時のプロ野球は、未熟だったとはいえ、力と力の対決であり、素朴でした。左投手が出たら右打者に替えたり、一回づつ分担して何人かでリレーする最近の野球とは違い、大味ながら迫力にあふれていました。西鉄の選手達の中洲での豪快な飲みっぷりも幾つかの記事で紹介されていました。

当時の製鐵所の雰囲気も、それと何かつながるものがありました。機械化、自動化が始まりかけた頃で、文字通り現場の肉体労働で汗を流し、職場の大

風呂でその汗を拭い、門の前の酒屋で角打ちをして別れる、コンピューターや自動車がない、その時代は、素朴な人間関係が自然にでき上がる雰囲気があったような気がします

1961年秋から三年余、私は社命によって、ブラジルのウジミナス建設の業務に従事し、現地イバチンガで勤務しました。ウジミナスは、日本鉄鋼業が初めて海外に進出し、技術協力し、鉄鋼一貫製鉄所を建設したプロジェクトであります。私は、高炉火入れの約1年前に赴任し、最終工程の厚板工場まで、次々と工場が動き、安定操業に入るまでを見とどけて帰国しました。この間の公私の記録をまとめたのが、昨年秋出版した「鉄の絆」であります。私は、この期間を通じ、ブラジルの人達と接し「その土地を愛し、その人を愛し、その仕事を愛する」という実感を得て帰って来ました。

1965年1月、私は八幡製鐵所に戻りました。職場は出身元の労働部でしたが、途中人事部門に移り、人事課長もつとめました。八幡の所内外の方々から暖かく迎えられたのもなつかしい思い出です。

私のいない間に5市は合併し、北九州市が発足していました。日本経済も高度成長の道を辿り、鉄鋼業も欧州先進諸国を抜き、1970年新日本製鐵が誕生したときは、生産量で世界1位のUSスチールを凌駕しました。

しかし、北九州地域では、この前後から公害問題が次第に大きくなり、かつて成長のシンボルとされた7色の煙は、厳しい批判にさらされます。鉄源は次第に戸畑地区に集約され、八幡地区は幾つかの圧延工場を残すのみとなりました。

1972年、私は新日鐵本社に移り、その後、八幡勤務の機会はなかったが、1年に2～3回は出張で来ていました。太平工業に移ってから、八幡、大分、福岡に支店があったため、北九州に来る機会は多くありました。エコタウンをはじめ、環境都市として変貌していく地域を眺めることとなりました。太平工業の会長2年目の頃、当時の末吉興一市長から「学研都市に来ないか」との勧誘がありました。

理事長は、学研都市の構想づくりにあたって有馬朗人先生で、私はその下で、運営にあたって欲しいとのことでした。

学研都市は、ご存知の通り、若松のひびきのキャンパスに、九工大、北九大、早稲田大の国公立3大学を集め、環境テーマを中心に、アジアの研究拠点を作り、同時に地域産業の振興発展に資するというものです。

私自身、転職を求めているときだったので、この話は非常に関心をそそられ、現地を視察した上で引き受けることとしました。

2001年4月オープン、私共の運営組織—北九州産業学術推進機構（FAIS）には、全国の各企業から種々な専門を持つエンジニアが集まり、各大学にも日本全国から先生達が集まり、スタートしました。産学官、種々な経歴を持った人々の集団を整々と動かすためには、目標を明示すること、それに向って全体の意地疎通と結集を図ることが重要です。幸いにして、すぐれたメンバーに恵まれ、成果をあげつつあると確信しています。

3年ほど経って、北九州市立大学の公立大学法人化の動きが出ました。このときも末吉市長の要請で、法人化の準備委員長をつとめました。この世界は、私としては全く素人の世界、しかし市のスタッフや、企業の有識者の方々の協力で、2005年4月、北九大は法人化し、私は理事長に就任しました。学長に九大から矢田俊文氏を迎え、法人化の整備と大学政策にのり出しました。学長を中心とする先生方や職員熱意と努力により、目下の処、中期目標も順調に達成しながら、進展していると思っています。

北九州は、冒頭書いたように、私が社会人としての第一歩を踏み出した所、そして10数年住んだ所、土地にも人にも強い愛着があります。現北橋市長の政策も着々と実行されつつあり、これに協力し、地域の一層の発展の資することも要請されています。

このように、北九州とのお付き合いの話を書いている内に、あらためて、この土地への愛着を感じているところです。